

## ホイットマンのイメヂャリィ (二)

清 水 春 雄

### (二) 母 の イ メ チ

母のイメヂを伴う語は **mother** 以外にも直接或は間接の表現が種々考えられるわけであるが、これらを代表するものとして、ここでは **mother** 一語だけを取り上げて論ずることとする。「草の葉」<sup>1</sup>に表れる **mother** は総数<sup>2</sup>94であつて使用例を次の如く分類することが出来る。或る語の頻度が、作品中におけるその語の惹き起すイメヂの重要性と正しく比例するものでないことは、前にも述べた通りであるが、イメヂャリィの大要を把握の上において有力な手掛りを得られることは確かであるので、一応その用例度数を添える。現実の母というのは描写的なイメヂを与えるものであつて54例あり、ホイットマン自身の母についての場合と、一般の場合とがある。比喩の母は40例であつて、それらは単に **physical** な類似や比較をもととしたものではなく、その **soul** を主とした場合が多い。例えば後述アメリカの項の如く、アメリカの **soul** の一面である自由が強調せられて、自由=アメリカ=母となり、アメリカを通じて母が自由の象徴となる場合もアメリカの項に含まれている。

母	現実の母	自己の母	12	
		一般の母	42	
母	比喩の母	国 土	ア メ リ カ	25
			ア ジ ア	1
			アイルランド	2
		河 海	海	5
			ナ イ ル	1
			ミシシッピ	1
		天 体	月	2
			星(ヴィナス)	1
		其 他	夜	1
			死	1

1. Centenary Edition に依る。

2. 他に複数の **mothers** が 15例あるが、すべて一般の母を表わす。

(1) 現 實 の 母    ホイットマンの偉大さが生れるに至つた要因について、或は遺伝或は環境或は靈感等の諸説があり、従つて彼の身辺は久しきにわたつて丹念に洗われている。しかも現在なお *New Orleans* 滞在期間とか、「草の葉」第一版及び第三版刊行直前の数年等については不明の点が残つており、伝記作家を当惑させたり或は創作させたりしている。

彼は「私自身でも自分の真の生活が判らぬのに、伝記作家という人々が他人の生涯を書くなどとは」潜越至極だという意味のことをうたつて<sup>3</sup>いる。主観的な詩人として内的生活が重大な意義をもつていたのであつて、外部的な一生の記録などは問題にしていないう態度が首肯できる。身辺描写は教祖の尊厳を害すると全じ理由で、殊更に不明にしてあるとだけ曲解するのは酷に過ぎるであろう。たしかに非常な親思いであり兄弟姉妹思いである彼が、その割にはわが家のことについて外部の人に語ることは好まなかつたようである。精神錯乱した兄のほかは酒乱の弟、白痴の末弟、不幸の結婚をした妹等をもつた彼、青年詩人たる彼の野心について全く無関心の家族をもつた彼が家庭を語らなかつたのも無理がない。家族全員の文学的無智が彼の孤独癖を強めたことはたしかであろう。それでは彼の祖先はどうであろうか。彼の家系については信拠するに足る伝記の最初のものとして *Bliss Perry* の *Walt Whitman* (1906) があげられているが、これによると彼の祖先の優秀さを立証する根拠がなく、それまでの一切のホイットマン神話は消滅する。*respectable* であるが *undistinguished* であつたことはたしかのようである。<sup>4</sup>

彼は「草の葉」の中で

此所で私は両親から生れ、両親はまたその両親から、そのまた両親は全じくその両親から、<sup>5</sup>

私が母から生れ出る前に代々の人達が私を導いてくれた、<sup>6</sup>

3. *When I Read the Book.*

4. *Gay Wilson Allen: Walt Whitman Handbook.* p.40.

5. *Song of Myself*, §1.

6. *Ibid.*, §44.

と歌つた手まえ、無関心では居られなかつたと見え、自ら祖先の系図を調べた結果は、16世紀 England の Abijah Whitman に至るまで遡ることが出来た。そしてこの Abijah の子 Rev. Zechariah が1640年かその直後に 'True-Love' 号でアメリカに渡つたものと信じた<sup>7</sup>。所がその牧師が子なしであつたことが後に判明したので現在一般に信ぜられているところは、その Zechariah もその前後には来てはいるが、前記の船で来たのは弟の John Whitman であつてマサチュセツに上つたことになつている<sup>8</sup>。その後次第に南下し、Connecticut を経て Long Island に渡り、ホイットマンの曾祖父の時代には500エーカーの大農場と奴隸をも持つていた。父の Walter の職は農業ではあるが Walt<sup>9</sup> の生れた頃は土地なしになつていて、彼が四才の時には、大工として Brooklin に引越してしまつた。ホイットマン家の家系からは遺伝が考えられるような秀でた人物は見当らず、精神的な活動をしたものとしては先の Zechariah 牧師以外には挙げる事が出来ない。併しこの父系からは立派な体格と、不屈の精神、自由への熱情を享けついだと考えられている。

母方の系統は Holland からの移民であつて、ホイットマンの外祖父は Major Cornelius Van Velsor<sup>10</sup> といひ馬匹飼養者兼運搬業、その父は Garret という名で機織業、その二三代前にアメリカへ渡つたものと推定されている。Major の妻 Amy (Naomi) が熱心なクエーカー教徒であつてその娘 Louisa (ホイットマンの母) は少くとも家庭内では母と共にクエーカー的習慣に従つていた。この母の影響としてホイットマンにはクエーカー的傾向が強いのであるが、彼自らそのことには相当誇りを感じていたようである。Amy の父は Captain John William であるがこの Captain は船長の意であつて「自己の歌」<sup>11</sup>に登場している。ホイットマンは全しく Long Island の海岸に近い Cold

7. G. W. Allen, op. cit., p.11.

8. Henry Seidel Canby: *Walt Whitman an American*, p. 10.

9. ホイットマンは最初父の名に因んで Walter と命名されたが、幼少の頃から Walt と呼び慣らされていた。公に Walt を自ら用いたのは「草の葉」第二版からである。尤も初版の句の中には用いている。

10. Major の title は所謂民兵団としてのものである。

11. *Song of Myself*, § 35.

Spring という村にあつたこの母の実家を屢々訪れている。殊に彼が6才から15才に至る少年期には再々永逗留していた。母その人はホイットマンへの多くの手紙などから学問的素養はなかつたと判ぜられているが、しかしおおらかな愛情の濃い人柄で家族の全員を強く掌握していた。

Well-begotten and raised by a perfect mother.<sup>12</sup>

と歌つた言葉が、正しく当る人であつたと考へられる。この母の影響の絶大であつたことは、凡ての批評家の認める所である。彼の心の中には、この母が一般の母親や家庭の主婦の典型として理想化されていた。彼が生涯独身であつた事については、性的理由もあると<sup>13</sup>考えられているが、兎に角その結婚で失つた空虚を母への愛情で満たしていたとの論も肯づかれるものがある。終生渝らぬ母への愛着は、ホイットマンが生涯持ちつづけた童心——驚異を感じ得る稚心、空想の翼を拵げられる若さ——の故で、母は彼にとって不断の憧憬であり慰藉であつた。1874年発表の *Prayer of Columbus* の中で a batter'd, wreck'd, old man (打ちのめされた敗残の一老人) としてコロムブスにことよせて自己を歌っているのも、その前年の二月に中風に罹つたことが主要な原因であろうが、更に五月に母を失つて意気とみに衰えたためと考えられる。

このような関係にある母であるが、実際に「草の葉」の中に表われるのは割合に少く12例であつて、而も特に母をテーマとして歌われたと見るべき詩は僅かに一篇である。晩年自分の死期近しと覚つた頃になつて、数多い作品の中に母に寄せた歌のないという迂濶さに気づいたかの如く、特に作つたものである。

わが母の思い出のために、神と融け合つた母性のために、  
 葬られ去つたとは云え、まだ私からは葬られず消えもせぬ彼女に対し、  
 (私はいまなお活き活きと美しい静かな慈愛深い顔をみる、  
 私は棺の寝姿の傍に坐り、  
 棺の中のやさしい懐しい唇、頬、閉じた眼に激しく接吻を繰り返す。)

12. *Starting from Paumanok*, §1.

13. H. S. Canby, op. cit., pp.190, 202.

大地と、生と、愛とすべてのうちで、私にとって最善の、現実的でしかも  
 精神的な理想の女性である彼女のために、  
 私が去りゆく前に、これらの歌の中に記念の一行を刻みつけ、  
 こゝに墓碑<sup>14</sup>を建てる。

独立したものとしてはこれだけであるが、他の作品中の一節として纏まつた  
 母のイメヂを浮き出しているものがある。

さて今度は或日私達が一緒に食事をとつていた時、母が私に話されたこ  
 と、  
 それは母が古い屋敷に両親と住んでおられた娘の頃の話である。

或日朝飯時に一人のインヂヤンの女が屋敷へやつて来た、  
 背には椅子に入れる蘭草の束を荷つていた、  
 真直で光沢があり、粗くて黒い房々とした彼女の髪は、半ば顔を蔽うてい  
 た、  
 歩き振りはのびやかで弾みがあり、声は話すたびに美しく響いた。

私の母はこの見知らぬ人を喜びと驚きをもつて眺めた、  
 母は彼女の生き生きした立派な顔と、よく伸びてしなやかな手足を眺め  
 た、  
 見れば見る程、母は彼女が好きになつた、  
 こんなに素晴らしい美しさと清らかさを見たことがなかつた。  
 母は彼女を炉の脇柱に近い長椅子に坐らせて、食事を作つて与えた、  
 母は彼女に与える仕事はなかつたが、思出と愛情を与えた。

土人の女は午前中いて、午後の半ば頃立ち去つた、

14. *As at Thy Portals Also Death.*

ああ、母は彼女に去られるのを嫌がつた、  
 その一週間づつと彼女のことを思いつづけていた、そして幾月も彼女の来  
 るのを心待ちに待つた、  
 母はそれから幾冬も幾夏も彼女を忘れなかつた、  
 併しその土人の女は二度とやつて来ることなく、その辺りで消息も聞かれ  
 なかつた。<sup>15</sup>

これは情け深かつた母の性格を窺うのに恰好の作品であるが、ホイットマン  
 自身の人懐こい気質に連るものがあるのを感じる。この他に母だけを対象とし  
 ているわけではないが次のような句がある。

晩年の感謝の言葉——私の去る前の感謝の言葉

.....  
 貴重な常に心にかかる思い出に対し（懐しい母上よ、あなたについて、父  
 上、あなたについて、兄弟、姉妹、友人、あなたたちについて、）<sup>16</sup>

子守唄や聖歌にきくわが母の声、  
 （その声、おお優しいかずつかずつの声、思い出の懐しい声、  
 奇蹟のなかの奇蹟、おお最愛の母の声、妹の声、）<sup>17</sup>

この他に母の挙げられる場合があるが、それは懐かしき母としての印象を主  
 としたのではなく、自己の生誕の事実に係わるものであつて、前述の「完全  
 な母によつて健やかに産まれ……」<sup>18</sup>も、「私が母から生れ出る前に……」<sup>19</sup>もそ  
 うであるが、更に次の如くも歌っている。

- 
15. *The Sleepers*, § 6.  
 16. *Thanks in Old Age*.  
 17. *Proud Music*, § 3.  
 18. *Starting from Paumanok*, § 3.  
 19. *Song of Myself*, § 44.

私が母の胎内に孕まれたということも素晴らしいことだ、<sup>20</sup>

この他に母方の昔の縁者として老水夫 Kossabone の臨終の様子を歌つたものがあつて、<sup>21</sup>母という語も二回出るが、母そのもののイメヂを伴うものではない。

次に一般の母については、先づ通俗の意味の母性愛がたたえられる。

私は母親の胸に抱かれて眠つている幼児を見る、<sup>22</sup>

そして母親は注意ぶかくくるんだわが児と一緒に眠つている、<sup>23</sup>

日向で草の上を匍い廻る雙子のはしやぎ、

母親は油断なきその目を決して彼らから離さない、<sup>24</sup>

家にいる母は夕餉の食卓に静かに皿を並べる、

言葉やさしい母は、清らかな頭巾と上衣をつけて、行き摺りに、そのからだや、着物からさわやかな匂いをふりこぼす、<sup>25</sup>

などの如く母の抱擁や心遣いに表れる大きな慈愛が称えられているが、これだけを以て

And I say there is nothing greater than the mother of men.<sup>26</sup>

「人の母たること以上に偉大なことは他にない」と云う最大の讃辞が生れたのではない。宇宙に漲る生産の力、性による増殖の力を常に感じているホイットマンが、母なるものの生む力をたたえることは当然であろう。「女は肉体の門である、そしてまた魂の門でもある」<sup>27</sup>という女人礼讃も、靈魂の個性化する最

20. *Who Learns My Lessons Complete.*

21. *Old Salt Kossabone.*

22. *Mother and Babe.*

23. *The Sleepers*, §1.

24. *Spontaneous Me.*

25. *There Was a Child Went Forth.*

26. *Song of Myself*, §21.

27. *I Sing the Body Electric*, §5.

高の場と考えられる人体を生むものとして、即ち女は母たるべきことを前提としているのである。

She too is not only herself, she is the teeming mother of  
mothers.<sup>23</sup>

の句が示す通り、女は自分だけのものではなく多くの母親たちを産み出す多産の母親なのである。母を生産、豊饒という意味の上から見ている事は、次の比喩の項へのわたりとして注意すべきである。

(2) 比 喩 の 母 [母=アメリカ]。母国という言葉が示すとおり、祖国を母にたとえることは極めて月並な現象に過ぎない。ホイットマンに於てももとよりそういう通俗な意味に用いている場合もあるが、多くはアメリカを単に国土として見ず、彼独自の人間的な見方で扱っている。即ち霊肉併せもつものとして考え、人間と全しく生成発展の過程を辿っていると見る。人間を歌うのに靈魂を主とする場合、肉体を主とする場合、その何れにも偏せず全体性に於て歌う場合とがあるように、アメリカについても凡ての人、凡てのものを産む母胎として、一切のものにとつて霊肉具現の場として、*mother of all* と考えられる場合が多いのであるが、その魂を主とする場合も、肉体即国土を主とした場合もある。アメリカの魂とえば、云うまでもなくアメリカ合衆国存在の原理即ち自由平等を基とした民主主義の理念であり、そこには必然的な期待として進歩発達繁栄の理想が伴っている。従つてアメリカの魂の歌も、多くの場合はこの全要素が含まれているが、時には自由の面が強調され 母=アメリカ=自由<sup>1</sup> から進んで直接母=自由の観を呈する場合もあり、時には生産繁栄<sup>2</sup>の面が強調されている場合もある。

ホイットマンは考える。広漠たる大陸に人種の混交による健全な民族をもつアメリカは、それ自体において既に誇るべき幾多の美質を持つている。その上

28. *Ibid.*, §8.

1. 例. *Virginia—the West; Delicate Cluster.*

2. 例. *Song of the Exposition; By Blue Ontario's Shore.*



に古きアジア、ヨーロッパの遺産で未だ用途の明かされぬままに残つている貴重な素材がある。これらを巧みに用いて独特の建築をなし遂げなければならぬ。

These States are the amplest poem.<sup>3</sup>

Land of lands and bards to corroborate!<sup>4</sup>

実にわが聯邦諸州は最も豊かな詩である。これらの諸州を固めて、国家中の国家を確証せしめようと詩人を待望する。

オンタリオ湖畔において私は幻霊に耳傾けた、

詩人達を求めるその声の高まるのを聞いた、

この国土に生れた雄大な彼らによつて、彼らによつてのみこれらの諸州が一国家としての緊密な有機体に溶けこむことが出来るのだ。

文書や印鑑や強制によつて人を結んでも意味がない、

人体の四肢や植物の繊維の結び合のように、生きた一の原則の中に一切を凝集するものだけが人々を結び合せる。

凡ゆる民族と凡ゆる時代のうち、詩的素材に満ちた気質のこれらの諸州こ

そ、最も詩人達を必要とし、そして最も偉大なるものを有つべきであり、

最も偉大な彼等を役立てねばならぬ、

彼らの大統領たちも、彼らの詩人以上に彼らの審判者となつてはならぬ。

(愛の魂と情熱の言葉よ！

最低の深处をも貫き、世界をくまなく見透す眼よ！

ああ、多産にしてすべてに充ち充てる母よ、しかも何と永く産まず不妊で

3. *By Blue Ontario's Shore*, §5.

4. *Ibid.*, §6.

おられたとことか、

これは *By Blue Ontario's Shore* (1856発表) の第九節であるが、第一行は1870年、第二行並に最後の三行は1865年の加筆である。従つて「母よ」との呼びかけも南北戦争後のものであつて、次の諸例に見る如くこの詩の他の節に表れている全じ意味の母なる語はすべて戦後の加筆である。

(おお「母」よ、私はあなたの考えに忠実でなかつただろうか  
私は生涯を通じてあなたとあなたのものを私の目の前に保つて来なかつた  
5  
だろ<sup>5</sup>うか。)

(抜きはなつた刀を手にする厳しき敏き感覚を有つ「母」よ、  
私は個人と直接でなければ相手にならぬあなたを遂に見た。)<sup>6</sup>

ただわが祖国のための詩人たちを私は喚び出す、

(戦は終り、戦場は片付けられたから、)

これから後は勝ち誇つた前進の曲を奏るだろう、

おお、「母」よ、あなたの限りなき期待の魂を楽しませ<sup>7</sup>んために。

母子の愛を国家とその構成因子との間に見ようとする考えは、他の多くの詩篇に溢れている

「一切の母」の子らよ、君らはやがて勝利に輝くであろう、

君らは更にまた全世界の攻撃をも嘲笑し去るであら<sup>8</sup>う。

という句があるが、これは初めカラムス詩群の第五番として出たもので、本来僚友愛による民主主義を強調した歌であつた。そして現在 *For You O*

5. *Ibid.*, §14.

6. *Ibid.*, §15.

7. *Ibid.*, §20.

8. *Over the Carnage Rose Prophetic a Voice.*

*Democracy* 中の初句をなしている *Come, I will make the Continent Indissoluble*. もともとこの詩に入っていたのであつて、諸州を結ぶものは法律家の手にかかつた紙上の契約や、或は武力であると期待してはならぬと説いている。所が今ではこの詩はこれらの土台の上に戦後「一切の母」なる観念が加わつた作品となつている。全しく戦後最初に発表されたものの中に *Pensive on Her Dead Gazing*<sup>9</sup> がある。憂に沈んで彼女の死者を凝視める「一切の母」の声を私は聞いた、彼女は忍びやかに歩きながら、戦場を蔽う屍体、千切れた肉体をみつめて、悲しみに充ちた声で大地に呼びかける。

南部のまた北部の私の死者を吸い尽せ——私の青年達の屍体を吸い尽せ、  
そして彼らの貴重な貴重な血潮を、

.....

今後幾世紀も地表と草の目に見えぬ精と香りとの中に、  
野を吹き来る大気の中に、私の愛する者たちを再び私に返えし与えよ、私の不滅の勇士たちを、

.....

彼らを放ち出せ、年毎に立ち返るいとしき死を、幾年も幾世紀もの後までも、

と英霊がいつまでも生れ替つて、祖国の栄えを共に頌つようと希つている。これは戦死者に対する感懐であるが、帰還勇士に対しての希いも次の如く表れている。先づ富で陰り、身にまとう衣裳の如く財宝に包まれた「母」を想う。

御身、静かな穀倉の幸多き「主婦」、

中央に坐して御身の世界を見下し、東部と西部を眺めやる草原の「女主人」、

一語を以て千里の道と百万の農場を与え、しかも何ものをも失うことなき

「天の配剤を司る女性」、

御身一切を享け容れるもの——御身寛容なるもの（御身はただ神の如く寛

9. 初め *Drum-Taps* (1865) に、現在は *Songs of Parting* に属している。

容である、)<sup>10</sup>

と豊饒なアメリカの国土を礼讃し、勇士たちに向つては、

……君たちの恐ろしい武器を棄て給え

これからは君達には別の武器と、南部や北部の耕地が与えられる、  
健全な戦争、楽しい戦争、生命を与える戦争と共に。<sup>11</sup>

と平和の戦いに挺身せよとすすめる。

その勇士らの働きを「一切の母」が見守つている。

I see where the Mother of All,  
With full-spanning eye gazes forth, dwells long,  
And counts the varied gathering of the products.<sup>12</sup>

Toil on heroes! toil well! handle the weapons well!

The Mother of All, yet here as ever she watches you.<sup>13</sup>

この行の次の stanza は Well-pleased America thou beholdest, / Over the fields of the West those crawling monsters で始まつているが、Mother of All=America の関係が明白にされている。そして近代化された農業機械を駆使して豊かな収穫をあげる勇士の姿に、母アメリカは満悦の態である。

この詩の中に於ても近代科学の発達に伴う優秀な農耕機械が謳われているが、更にこのような科学の著しい発達が各種産業の躍進を招来し、アメリカの繁栄を確固不動のものたらしめた趣を歌つたものが *Song of the Exposition* (1871)である。これは同年九月にニューヨークで催された第40回博覧会の開会式に誦せられたものであるが、後には一般に産業の発展に資する博覧会への讃歌となつた。

一切はあなたのもの、おお聖なる合衆国よ、

10. *The Return of the Heroes*, § 3.

11. *Ibid.*, § 6.

12. *Ibid.*, § 7.

13. *Ibid.*, § 8.

船舶、農園、店舗、穀倉、工場、鉱山、

都市と州、北部と南部、細目と集積、

畏き「母」よ私たちはすべてを挙げてあなたに献げる<sup>14</sup>

とアメリカなる母に呼びかける。

私達は今日我々の時代のために建設するのだ

埃及の金字塔よりも雄大な、

希臘羅馬の殿堂よりも華麗な

ミランの彫像や、尖塔のある大伽藍よりも誇りやかな、

ラインの古城の天主閣よりも更に美しきものを、

それらの凡てを凌ぐものを私達はこれから打建てようと計画する。

あなたの偉大な伽藍として墳墓などのない聖なる産業の伽藍を、

実用的な発明の生活のための天主閣<sup>15</sup>を、

この伽藍はどのようにホイットマンの心に映つたか。恰も眼覚めて見る幻の中のように浮ぶものは、……これまで嘗てなかつた高く美しく広き宮殿を囲んで、/ 史上の七不思議を凌ぐ地上の近代的奇観、/ ガラスと鋼の正面をもち幾階にも重なりそびえる、/ 太陽と空映えて、いと快き色に彩られる、/ 青銅色、薄紫色、緑青色、水色、そして深紅色、/ それらの金色の屋根の上に翻るあなたの自由の旗、/ その下に諸州の旗と他の国々の旗、/ これらの高き美しき一群<sup>16</sup>だけでなく、より小さい宮殿も集り建つてあろう。

と宏壯華麗な産業の大殿堂には人間生活を推進向上させる一切の力、ただにアメリカのみならず、世界のすべての労働者の働きが展示されている、と歌い最後に

While we rehearse our measureless wealth, it is for thee, dear  
Mother.<sup>17</sup>

14. *Song of the Exposition*, § 8.

15. *Ibid.*, § 5.

16. *Ibid.*

17. *Ibid.*, § 9.

と無限の富を数えあげるのも愛する「母」よ御身のため、私達の歌も御身の *electric, spiritual soul* のためであり、私達の自由はすべて御身のうちにある、私達の生命そのものも御身のうちにあると結んでいる。

この *mother* が *title* として用いられたものがある。 *Thou Mother with thy Equal Brood* であるが、そこでは個々の諸州を結ぶ多彩な鎖、永遠に続く独立国家のための種子を播こうと歌い、彼が理想の真の合衆国の完成せる姿を想う。「私は自分の求める家への道ならしをする。併し家そのものは後の世の人達のために遺す。」<sup>18</sup> という有名な句もこうした未来への望みを表わしている。そこでは永い歴史によつて準備された素材がここに集められて、科学に道徳に文芸に潑刺とした新らしい世界が建設される。彼はアメリカを或は自由の翼をひろげた逞しい鳥が歓びに溢れ、宏漠たる空間を天高く翔け昇る姿にたとえる。<sup>19</sup> 或は旧世界の知力の後続者として完熟せる林檎にたとえる。<sup>20</sup> こうした母の胎内から偉大なる嬰兒達が続々と生れ出る。偉大なる芸術家、教育家、学者、伝導者の生れ出ることを予言する。現在に抑えられぬ未来がこの子らによる尨大な生長、比類なき飛躍となつて表れると夢みる。この詩の中にも「一切の「母」を用い、

(To thy immortal breasts, Mother of All, thy every daughter,  
son, endear'd alike, forever equal,<sup>21</sup>)

と等しく愛され永遠に平等である娘や息子を胸にした「一切の母」が画かれている。これと全じイメヂャリィは *America*, (1888) にも表れている。

平等の娘たち、平等の息子たちの中心、

成年も未成年も、若きも老いたるも、

強きも、豊かなるも、美しきも、忍耐強きも、有能のものも、富めるもの

も、凡ては等しく愛せられている、

大地と共に、自由、法則、愛と共に窮まりなく、

18. *Thou Mother with thy Equal Brood*, § 1.

19. *Ibid.*, § 2.

20. *Ibid.*, § 3.

21. *Ibid.*, § 5.

気品あり思慮深く、聳えて高く坐せる御「母」は  
永劫の「時」の只中に在ます。

と不壊なる「時」と結ばれて、母なるアメリカの永遠性が謳われているのである。なお一切の母の表現は彼の歿する前年 '91年作 *Old Chants* にも表れている。わが新世界が負っている数え切れない多くの負債の中で、恐らく最大の負債は、昔の詩歌に負うものであろう、徒らに拒否排撃することなく、過去の詩聖に耳傾けるべきであると謙虚な態度を示している詩であるが、そこでも母国を *Mother of All* と呼びかけている。

ホイットマンの散文にもこの「母」のイメヂが、屢々表れるがその著しいものは *Democratic Vistas* の結論にある「聖なる母、アメリカ」であろう。物心両界に亘つてあらゆる未来の上構えを荷つて永遠の時をすすみゆく均斉のとれた民主主義の具象と見ている。

アメリカ以外にも「母」が表わす場合のあることは前掲表の通りであるが今回は省略する。

### (三) 夜 の イ メヂ

夜は眠りや死や星辰とならんで、<sup>1</sup> 靈魂の最愛のテーマの一つであると、ホイットマン自ら歌っている。従つて夜という語も屢々表れるわけであるが、夜だけを中心主題としている場合は殆んどなく、大方の夜は脇役的存在である。併しこれを欠いては主題の気分を作り出す雰囲気<sup>1</sup>が保たれないために、夜はその *situation* の重要な要素となつている場合が多い。魂とか生命とか死とかいう神祕的なテーマが多いのであるから、自然これらの背景或は附隨の条件として闇を伴う夜が考えられるわけであつて、彼が黙示を受けるとして好んで歌う星辰も、夜空なしには効果が期待できないのである。

このような神祕的な *situation* の醸成者としての媒介的な役目が多いため、夜自身が比喩的なイメヂとして活躍する場合は極めて稀れであつて、その少な

1. *A Clear Midnight.*

い比喩的なイメージも大部分は直喩的なものとなつている。

夜は死と結ばれて考えられやすいが、「草の葉」の初期第一二版にはその例がなく、寧ろ反対に生成発展の根元たる性と結ばれて「女」と見られ、次いでその抱擁力を主として「母」と見られる。第三版以後に死を思う場として表われ、最後には老令が夜にたとえられるようになり、新たな生までの憩いの場であると同時に完熟せる叡智にもとづく洞察力の根源とも考えられている。

初版から表われている作品で夜の語を多く含むものは「自己の歌」と「眠る人々」であるが、先づ前者について夜を辿つて見る。「私は男性の詩人たると同時に女性の詩人である、/そして男であることと同様、女であることは偉大であると私は云う、/そして人の母たること以上に偉大なことは他にはないと私は言う。/私は膨脹の歌を唄うのだ、<sup>2</sup>」と叫んで肉感的な大地や、裸で身を任す海のア撫を讃えるのであるが、この大地と海を包む夜については、

「私はやさしく更けゆく夜と共に歩く男だ、  
私は夜に半ば包まれた大地や海に呼びかける。

胸も露わな夜よ、そば近く寄りそえ——ひたと寄りそえよ、魅力あり滋味  
多き夜よ、

南風の夜よ——大いなる星のいくつか見ゆる夜よ、  
絶えずうなづく夜よ——狂わしげな裸の夏の夜よ。<sup>3</sup>

と愛の交流を助ける背景として、こうした愛欲の情念を馭りたてる要因として夜が考えられている。夜の神秘性、その抱擁力に富む活力源が考えられている。全じ趣は、

(接触到に優るもの又劣るものがあるか。)

論理や説教は決して人を納得させぬ、  
夜の湿りがより深く私の魂に泌み入る。<sup>4</sup>

2. *Song of Myself*, §21.

3. *Ibid.*

4. *Ibid.*, 30.



と歌い、夜の神祕性に包まれた接触に一切の真理が包蔵されていると説く。

「眠る人々」に於ても夜は全しく活力源であるが、眠りによる回復力に主眼が置かれている。病人でも負傷者でも「夜は彼らに滲み透り彼らを覆い包む<sup>5</sup>」のであるが、彼らばかりでなく罪人、裁判官、笑う者、泣く者、白痴、未開人、等々一切の人間について、

彼らは今は平等になつたと私は誓つていう——何人も他の者に勝ることが  
ない、

夜と眠りとが彼らを同一にし彼らを回復したのだ。<sup>6</sup>

一切が平等化される世界は争いなき世界と見られて、「平和は常に美しい、  
天界の神話は平和と夜を示している<sup>7</sup>」と夜は平和に縁づけられている。回復力  
については更に、

腫れたものも痙攣したものも鬱血したものも元気になつて目覚める、

彼らは夜の補強作用、夜の化学作用をうけて目覚める<sup>8</sup>、

と歌つて夜の強壯化の能力を讃える。

このような働をもつ夜への自己の特殊な愛着を次の如く表わす、

私もまた夜を通つて来ているものだ

おお夜よ、私は暫く離れているが又御身に立ち帰り御身を愛する<sup>9</sup>。

この愛は抱擁力を有する母への愛であつて、同節最終行に於て夜は *O my mother* と呼びかけられ、母=夜のイメヂが確認せられている。

どうして私が御身に身を任せることを怖れよう、

私は怖れない、私は御身によつて立派に育てられたのだ、

私は豊かに駆る真昼を愛する、しかし私が永く身を横えていた彼女を棄て

ぬ、

私がどうして御身から来たかは判らない、またどこへ御身と行くのかも判

5. *The Sleepers*, §1.

6. *Ibid.* §7.

7. *Ibid.*

8. *Ibid.*, §8.

9. *Ibid.*

らないが、立派にやつて来たこと、そしてこれからも立派に行くことは判っている。

私は夜と暫くの間とどまり、朝早く起きる、

私は日中を正しく過す、おお我が母よ、そして御身の許へ間違いなく帰る。

初版から無題で表れていて後に *Children of Adam* 詩群に収められた作品に *I Sing the Body Electric* がある。これはその sensuality の大胆な表現によつて、彼の詩を特異のものたらしめた主要因の一であるが、この九節164行からなる詩の中に夜という語が只一語だけある。そしてその語が古今の英文学上最も麗わしいとも評せられる性のイメヂャリ<sup>10</sup>を荷う役目を負わせられている。

Bridegroom night of love working surely and softly into the  
prostrate dawn,

Undulating into the willing and yielding day,

Lost in the cleave of the clasping and sweetflesh'd day.<sup>11</sup>

勿論ここでは日夜が通俗に考えられる性別と所を換えているが、兎に角、初期に当つては夜が性とか抱擁とかを通して生に縁づけられていることが窺えるであろう。

夜に死の影が添えられたのは *Out of the Cradle Endlessly Rocking*, (1859)に初まる。ホイットマンの詩の中で最も美しいものの一として知られているこの「揺り籃」の歌の死の悟りは、夜の海辺で得られたことになっている。「おお、私に手がかりを与えよ、(それは夜間、どこかこの辺りに潜んでいる、)」と海への呼びかけに対し、

それに答えて海は、

ためらわず、あわてず、

夜通し私に囁いた、そして夜明け前に極くはつきりと、

10. H.S. Canby, op. cit., p.192.

11. *I Sing the Body Electric*, §5.

低く楽しい言葉、死と私に囁いた、  
そして又も死、死、死、死と。

この歌は彼の少年時代の回想の歌ということになつてゐる。曾てポウマノクでライラックの匂う五月の頃、海辺の野茨にアラバマから飛んで来た一番の小鳥がおつた。やがて巣には淡緑色の卵が四つ見えた。雄鳥は毎日楽しげに巣の廻りを飛び廻り、雌鳥は巣を守つていた。彼は邪魔にならぬように毎日見に行つた。所が或日雌鳥がどうしたか見えなくなつていた。殺されたのか、どうしたのか雄鳥にも判らぬ。次の日も次の日も帰らなかつた。それから夏の間ずつと昼夜をわかたず、雄鳥は狂気のように妻を求めて野茨の上や波の上を飛び廻つていた。

「吹けよ、吹け、吹け、  
海風よ吹きあげよ、ポウマノクの岸辺に沿うて、  
私は待とう、お前が私の妻を私の許へ吹き返すまで、私は待とう。」

「宥めよ、宥めよ、宥めよ、  
一つの波に続いて後からの波が宥めてゆく、  
そのまた後から他の波が寄りそいかい抱いてゆく、  
だが私の愛するものは私を宥めてくれない、この私を。

月が空低くかかつてゐる、晩く昇つた月が、  
それはためらつてゐる——ああ、きつと月も愛に、愛に、悩んでいるのだ  
ろう。

おお、狂わしげに海は岸辺におしよせる、  
愛をこめ、愛をこめて。

おお、夜よ、あの磯波の間に羽搏くものはわが妻ではないか、  
あの白波に見える小さな黒いものは何だろう。

声高く、声高く、声高く、

声高く私はお前に呼びかける、私の愛するものよ。」

星空の下に夜もすがら、海こけの絡みついた杭の先にとまつて叫ぶ雄鳥の腸を断つ歌声を、物影に身をよせながら少年はいつまでもいつまでも聴いていた。こうして歌の心を解いた。夜風は強まり波は怒る。こうした中に聞いた詠歎の曲は子供の魂を捉えた。何故とも知らぬ涙が頬を流れ落ちた。永く心の中に閉ざされていた愛が堰を切つて溢れ出したのである。子供はこうして舌の使用に目覚め自分は何のために存在するかを知つた。愛を歌つた無数の過去の詩人たちは異つた立場から、愛の歌をうたおう、満されぬ愛の叫びを私の裡から失わせまいと誓つた。それは死と連る愛の悟りであり、humanist としての詩人の目覚めであるが、このようにしてホイットマンが死と愛の悟りを得た背景が夜である。「揺り籃」の歌と並んで傑作に数えられるものに *When Lilac Last in the Dooryard Bloom'd* というリンカン追悼賦がある。年毎に立ち還る春が三つのものを私に齎す、咲き出でる多年性のライラックと、西方に沈む星と、そして私の愛する彼の思出を、と歌い出す。それは晩咲きのライラックが庭さきに匂う頃、大いなる星が西の空に姿を消した悲しみの思い出である。戸毎の弔旗に合衆国の全土は叢雲に掩われた。星を隠した闇、夜の濃い影、思いに沈んだ涙の夜であつた。私は死の現実の認証と死の想念との両者と共に、ほの暗い沼地に囀る隠者の小鳥を訪れた。灰褐色の小鳥は私達三人の伴侶を享け容れて死の讃歌と懐しき彼への一篇の詩を歌つて聞かせてくれた。私の魂は小鳥の歌と調べを合せてその死の讃歌を歌つた。<sup>12</sup>

その中では死を優しく宥めるもの、神祕の母、強き救いの主、lovely and soothing death; dark mother; strong deliveress 等と呼びかけて歓びの夜曲を捧げ、広々とした野山も、大空も、宏大な物思わしげな夜も、あなたに相応しいと歌っている。

この「ライラック」の詩は16節からなるのであるがその中には night という語が27例あり、最も多いのは第8節で殆んど各行に用いている。

12. *When Lilac Last in the Dooryard Bloom'd*, § 14.

おお、空ゆく西の星よ、

私が歩き廻つてから一月した、今御身の意味したに違いないものが解つた、

澄んだ影さす夜を無言で私が歩いた時、

夜毎私に傾いて何か言いたげに見えた時、

御身が私の傍にでも来るように低く降つた時、(その時他の星が皆それを眺めていた、)

厳かな夜を私達が一緒にさまよつた時、(何故か眠れぬものがあつたのだが、)

夜が更けて西の端に悲しみに充ちた御身を私が見た時、

涼しく冴えた夜、そよ風うけて丘に立つた時、

御身が通り過ぎて夜の暗闇に消え去つた所を見守つた時、

私の魂が解けぬ悩みに打沈む時、そこに悲しげな星の御身が、

つとめ終えて夜の中に降り姿を消した御身の意味が解つたのだ。

彼が最後の節で、シムボリカルな星や小鳥やライラックの香の絡みついた彼の魂の頌歌を歌いあげるのに、すべての夜の中から収めたものはみな取つて置こう、

Yet each to keep and all, retrievements out of the night,<sup>15</sup>

と云っている所から見てもこの詩が夜を離れてはなり立たぬことは明かである。併し夜は暗の外に秘密の意をもっているので、上記の背景も陰惨破滅等否定的精神よりも寧ろその神祕性を主としていると見るべきである。死の讃歌中の dark mother の dark も神祕なるの意味にとるべきである。なおその死は前述の如く、和ぎ鎮める soothing death であつて、例えば戦死者についても「彼ら死者は安らかに瞑目していた、彼らは苦しまなかつた、生きている者が残つて苦しんだ、」<sup>14</sup>に見られる死である。この死と夜の関係を姉妹と見て次の如く歌っている場合もある。

13. *Ibid.*, § 16.

14. *Ibid.*, § 15.

Beautiful that war and all its deeds of carnage must in time be  
utterly lost,

That the hands of the sisters Death and Night incessantly softly  
wash again, and ever again, this soil'd world;<sup>15</sup>

1871年の作に *On the Beach at Night* があるが、この辺りから、夜一星一魂の関係が繁くなつて、星よりも不滅な魂の教説が夜を背景として展開される。死も生命の一位相としてやがて新たな生に替る一階梯であり、安んじて容け入れられるものと考えられる。海のイメヂの項に於ても述べたように、

睡眠や夜や死そのものからさえも、  
不滅の誕生の韻律が織り出される。<sup>16</sup>

今は生へ甦る死との信念に安んじて死を見ているのである。この死に連る夜も全じ考えで見られている。このような安らかさに達した老令こそ真に静かにものを考え、深く事の理を究める絶好の時であるとして、老令と夜と魂の交渉が強まる。

This is thy hour O Soul, thy free flight into the wordless,<sup>17</sup>

いまこそ靈魂にとつて言葉なき世界へ自由に飛翔すべき時であると歌う。

*Youth, Day, Old Age and Night* (1881) では、潑刺たる青春は優雅と力と魅力に充ちているが、その後に全じく優雅と力と魅力をもつて老令が来る。それは

赫々として素晴らしい白昼——巨大な太陽と活動と大望と笑いの白昼、  
夜がすぐその後につづく、幾百万の恒星と睡眠と回復の闇を伴つて、  
と歌つて、老令を夜にたとえている。そこでは依然、夜の回復力が讃えられているようであるが、力点は幾百万の恒星 millions of suns を伴うことにある。前掲 *A Clear Midnight* に於けると同様、書籍や過去の芸術に囚われぬ心のままなる魂の活躍の時を夜と見ているのである。更にこの考えを次の '88 年作

15. *Reconciliation.*

16. *And Yet Not You Alone.*

17. *A Clear Midnight.*

の詩が明らかにする。

日中の眩しさが去つた後に、

ただ暗い暗い夜が私の眼に星を示す。

荘厳なオルガンや合唱や見事な楽隊の後に、

私の魂を横切る沈黙が真の交響楽を奏でる。<sup>18</sup>

自然の理法、人生の奥義を悟るには、老令に埃たなければならぬという趣が示されている。

以上は夜が初めは女や母と見られて生殖力に縁づけられ、次には死と結ばれて、その鎮静力が買われ、最後には老令と比べられてその静思冥想の時、即ち達観、洞察力が崇ばれている。生と死、そしてその統一という弁証法的な辿り方はここにも見出される。何れの場合もこれらの夜のイメヂは肯定的な立場にあるが、通俗にいう夜の闇、光明のない闇の如き否定的な例も乏しいながら全然ないわけではない。

(若し私達が亡びたとしたら、それは他の勝利者が亡ぼしたのではない、

私達自身で永劫の夜に降つてゆくのだ、私達自身の故だ。<sup>19</sup>)

と夜は滅亡を表わし、

夜から陰鬱な想念から抜け出でて御身のことを思い

御身、和合の聯邦を切に思う、……<sup>20</sup>

では夜は陰気なものとされ、

太陽はいま沈んで強い光は追い散らされた——(私もやがて追い散らされて消えさるだろう、)

靄——涅槃——憩いと夜——亡却。<sup>21</sup>

と珍らしくも気の沈んだ己れの姿を画いて、夜は埋滅亡却の淵となつているが、これは病後の而も老令の作(1887年68才)の作で、病勢の一進一退の影響を表わすとも見られる。全じ年に次の如き不屈の意気を示している点を考え合

18. *After the Dazzle of Day.*

19. *By Blue Ontario's Shore*, § 2.

20. *Wandering at Morn.*

21. *Twilight.*

せる要があろう。

常に屈せず、断乎として斗う人間の魂。

(先の部隊は敗退したのか、それでは私達は新たな部隊を派遣する——  
してさらに新手をば。<sup>22</sup>)

#### (四) 草のイメージ

「草の葉」という詩集の名が象徴的にホイットマンの詩想を表わすであろうとは、容易に想像出来ることであるから、草がホイットマン自身を指すということも直ちに推量出来る問題である。この推量の正しいことは既に前稿「自己のイメージ」の中で触れた通りである。「自己の歌」第一節の中でただ一つ現れる自然物は、彼がそれを眺めてぶらつくという一本の夏草 (a spear of summer grass) であり、52節に及ぶこの長詩の最後に現われる自然物も全しく草であつて、「私の愛する草から再び生え出ると私自身を土に遺贈する、/ 若し君がまた私に会いたいならば君の靴底の下に私を探すがよい。」と歌う。このような草への深い関心、否愛着はどこから生れているのであろうか。

「自己の歌」第5節に、草に臥して己れの魂のささやきに耳傾けて忽然神の霊との連り、生命の神祕、萬有の根源としての愛を感じずるくだりがある。悟り開けた眼に最初に写つたものが身近の草であつて、野辺には草の葉限りなく、葉蔭にかくれる蟻などにも限りなき生命のゆき渡つていることに気付く。この草への関心は直ちに次の第6節に於て、草とは何かと幼な子をして問はしめる形で自問自答している。

一人の子供が両手に一ぱい草をもつて「草つて何なの」と私にたづねた。

どうして私がお子に答えられよう。私も全しく何だか解らないのだ。

私は思う、それは私の気質の旗印で、明るい緑の糸で織られたものに違いない。

22. *Life*.

1. 小樽商大「人文研究」第10輯 p. 82.



それとも、それは神のハンカチかもしれない、  
 わざと落した香りよい贈りもの、記念の品だろう、  
 そしてどこか片隅に持ち主の名がついているのだ、誰れのものか私達が見  
 てすぐ判るように。

それとも、草そのものが子供なのだ、植物界の産んだ赤ん坊なのだろう。

それとも、それは普通の象形文字かもしれない、  
 それは広い地域にも狭い地域にも等しく生え、  
 白人の間と全様、黒人の間にも繁り、カナダ人、ヴァージニャ人、代議士、  
 黒奴のいづれにも等しく、私はそれを与え、また彼らからそれを受ける  
 からだ。

そして又それは美しい未だ刈られぬ墓場の髪のように思われる。

撓やかな草よ、私はやさしくお前に触れてみよう、  
 お前は若い人々の胸から萌え出たものかも知れない、  
 若し彼らを知っていたなら、私は彼らを愛したであろう、  
 お前は老人からか、或は母の膝からいち早く奪い去られた嬰兒から、生え  
 出たものかもしれぬ、  
 そしてここにお前は母の膝となつている。

この草は老いた母の白髪頭からにしては余りに黒い、  
 老人の色あせた髯よりも色が濃い、  
 薄赤い口蓋の下からにしては黒すぎる。

ああ、私は結局、語られる多くの言葉を認める、  
 そしてそれらが口蓋から無意味に出されるものではないと認める。

私は夭折した男女について何か暗示を解くことが出来ればよいと思う、  
そして老人や母親たちや、その膝からいち早く奪い去られた嬰兒たちにつ  
いての暗示を。

若者や老人たちはどうなつたと思うか、  
また女や子供たちはどうなつたと思うか。

彼らはどこかに生きて元気である、  
極く小さい芽生えでも 真の死はないことを示す、  
そして若しあるとしたならば、それは生命を押し進めるので、それを捉え  
ようと終点で待つてゐるのではない、  
そして死の瞬間に生が現れる。

一切は上へ、前へと進み、何一つくづれ去るものはない、  
そして死ぬことは人が想像しているのとは違い、より仕合せなことなの  
だ。

要するに草はホイットマンの抱く汎神論的傾向を象徴しているのであつて、  
それは普遍の生命でありそこには真の死滅がない。このような意義を有つもの  
と見れば、卑小なりと雖もその存在の神祕なること、  
一片の草の葉も星辰の運行に劣るものではない、<sup>2</sup>  
のであつて、凡そ自然に存在するものであつて尊厳でないものはなく、蟻も完  
璧、一粒の砂も完全ということになる。そして卑近な草も星と全様、天地自然  
の理を悟る手掛りとなる。

諸々の天体よ——おお、墓場の草よ——おお不断の転移と向上よ、  
若し御身たちが何事も語らなかつたならば、どうして私が何事かを語るこ  
とが出来よう。<sup>3</sup>

2. *Song of myself*, § 31.

3. *Ibid.*, § 49.

前にもその例が出ているが、彼は好んで墓場の草という表現を用いる。死即生の関係を草を以て象徴させようとしているのである。またその死が諸々の悪の結果であるとしても、新なる生は善として甦る。

その草の穂という穂は、恐らく曾ては伝染性疾病であつたものから生い立<sup>4</sup>つて来たものだろう。

と善悪共に糧として「草の葉」という健全な自己の詩想が生れ出ている趣を暗示する。

草の葉限りなしという観念は、ただに縦に永遠の生命を表わす許りでなく、横に無限の普遍性を表わす。

This is the grass that grows wherever the land is and the water<sup>5</sup>  
is,

これは土地ある所、水ある所、どこにも生える草であつて、地球をつつむ空気と等しく遍在する。

草の永遠性、普遍性の本質の上に、外観上の素朴さを彼が賞していることは彼自らの表現について、草のように素朴な言葉 (words simple as grass)<sup>6</sup>と評していることから判る。

次に Calamus の詩群が友情 (時に同性愛とも解かれている) を扱っている所から、カラマスが友愛の象徴として用いられていることは、And this, O this shall henceforth be the token of comrades, this calamus-root shall,<sup>7</sup> という句からも明かであるが、そのカラマスが the wild flag, with its stiff phallic leaves and phallic-shaped root<sup>8</sup> であるとする、彼の一般の草のイメヂとは同一に論ずることが出来ない、併し草の群に友愛を感じている事は次の通りである。

草原の草を踏み分けて、その特殊の匂を吸いながら、

4. *This Compost.*

5. *Song of Myself*, §17.

6. *Ibid.*, §39.

7. *These I Singing in Spring.*

8. H.S. Canby, op. cit., p.182.

私はそれに靈的な類似を求め、  
人間の最も豊かな親密な友情を求め<sup>9</sup>る。

彼はこの草原から言語、行動、存在の葉片が発生することを求める、アメリカの大草原が育む粗野な併し不敵な精神、清新潑刺たる内陸の大地から生れた情熱の発露を求めている。

以上のような草のもつ諸性質を兼ね備えたものが自分であるとして、ホイットマンは自己を草にたとえているのである。従つて彼の詩篇たる「草の葉」は、永遠性、普遍性、卑近性に、友愛、素朴、剛健等の特性を合せたものを象徴する標題を戴いているのであつて、彼の思想と詩観をこの一つの title に籠めさせている。彼が生涯の隠れ簞として愛用したのもことわりである。

この title が初版に用いられてからは、当然のことながら単に *Leaves* と言えば、この詩集或は彼の詩篇を表わす場合が多い。

わが胸のかおりよき草よ、  
お前からの葉を集め、後の日によく読まれるように、私は書き記す、  
私を超え、死を超えて、伸びゆく墓場の詩、肉体の詩を、  
多年性の根、丈高き葉、おお、冬もやさしき葉のお前を凍らせまい、  
年毎にお前は隠れ家からまた現れて、再び花をつけるだろう。

通りすがりの多くの人が、お前を見付けてそのかすかな匂を嗅ぐかどうかは分らぬが、少しはあると信ずる。

おお、華奢な葉よ、おお私の血の華よ、お前の包むその胸を思うがままに  
語ることを許<sup>10</sup>そう。

に於て葉及詩の訳語を当てた箇所は凡て *leaves* である。また次の諸作でも *leaves = poems* が明かにされている。

Here the frailest leaves of me and yet my strongest lasting,  
Here I shade and hide my thoughts, I myself do not expose

9. *The Prairie-Grass Dividing.*

10. *Scented Herbage of My Breast.*

them,  
 Aud yet they expose me more than all my other poems.<sup>11</sup>

Thither we also, I with my leaves and songs, trustful, admirant,  
 As a father to his father going takes his children along with  
 him.<sup>12</sup>

I remember I said before my leaves sprang at all,  
 I would raise my voice jocund and strong with reference to  
 consummation.<sup>13</sup>

「草の葉」全篇の中で leaves という語は52例あるが、そのうち実際の木の葉が16例、草の葉が20例、「草の葉」の詩篇が16例となつている。Leaves of Grass という連りは title だけであつて、a leaf of grass が一度表われるが実際の草の葉である。詩の意味では常にただ leaves だけを用いているが、更にその例を一二加えよう。

Take my leaves America, take them South, and take them North.<sup>14</sup>

You lingering sparse leaves of me on winter-nearing boughs,<sup>15</sup>  
 単数の leaf は9例あつてそのうち詩の意味に用いられているものが3例ある。

Bear forth to them folded my love, (dear mariners, for you I  
 fold it here in every leaf;)<sup>16</sup>

O friend, who'er you are, at last arriving hither to commence,

11. *Here the Frailest Leaves of Me.*

12. *Savantism.*

13. *So Long!*

14. *Starting from Paumanok, §4.*

15. *You Lingering Sparse Leaves of Me.*

16. *In Cabin'd Ships at Sea.*

I feel through every leaf the pressure of your hand, which I  
return,<sup>17</sup>

A leaf for hand in hand,  
You natural persons old and young!<sup>18</sup>

最後に実際の草について一言しよう。草に埋もれた小徑を歩み、或は豊かな草の褥に臥して思にふけつた等の句が随所にあるので、格別の意味をもたせない自然の草も屢々表われる。その場合は多く草地の意で *the grass* となつてゐる。前述の *a leaf of grass* という表現については難があつて *a spear of grass* 又は *a blade of grass* となすべきだとの説もあるが、これに対してはホイットマン自ら *a leaf of grass* も決して不当ではないと力説しているようである。たしかに *spear* や *blade* は例えば禾本科などの場合は相応しいが、クローバーの葉には不適當であろう。葉の意味の *spear* は4例、*blades* は3例のうち *blades* = 詩が2例ある。(blade二例あるも刃の意)。

自然の草については香りと永遠性が好まれている。

地表と草の目に見えぬ精と香との中に、<sup>19</sup>

私は草の香を嗅ぐ、湿つぱい空気とバラの匂とを、<sup>20</sup>  
等でも、草だけが対象になつてゐるのではないが、その香の中に何か隱微な予言的意図をもつ自然物の一として考えられている。

草の香こめたそよ風のわたる健康な高地、  
そして緑の草、年毎に甦る美妙的な奇蹟、<sup>21</sup>

では香りと永遠性が結ばれる。草の永遠性は天地自然の悠久なると変りがな  
い。

17. *Small the Theme of My Chant.*

18. *A Leaf for Hand in Hand.*

19. *Pensive on Her Dead Gazing.*

20. *The Mystic Trumpeter*, §3.

21. *The Return of the Heroes.*

永い永い間、草は生い茂り、  
 永い永い間、雨は降りそそぎ、  
 永い永い間、地球は回<sup>22</sup>転をつづけて来た。

ホイットマンの晩年になるとこの永遠性も生命復活の面が強調せられるようになる。即ち永遠にたち返る春のしるしの一つとして見る場合が多い。

洋々たるポトマックの岸辺、又も聞く昔の言葉、

.....

またも見る不死の草、静かに柔かな緑の草、おお、春の日よ、君のものを  
 与えよ、この本を閉じる前にその頁に挟めるように、

.....

おお、不死の草よ、君のものを与えよ。<sup>23</sup>

春と共にたち返るものは勿論草だけではない。

如何なるものも本当に亡くなるものはなく、亡くなることも出来ない、

.....

凍つた土にも常に春の目に見えぬ法則が立ち返る、  
 草や花や夏の果物や穀物を伴つて、

と *Continuities* で歌っている。尤もこの詩には *From a talk I had lately with a German spiritualist* と註してあるが、ホイットマン自身の考えと全く同一である。それはこの詩と全じ 1888 年に出ている *Soon Shall the Winter's Foil Be Here* に次の如く歌っていることから明かである。

やがて冬の退く日が此処に来るだろう、  
 やがてこの氷の束縛が施み解けるだろう、.....

.....

.....君は大地の素朴な展示、微妙な奇蹟を感知するだろう、  
 たんぽぽ、クロバー、エメラルドの草、早春の香りと花を。

全しく自然の草を愛するにしても初期の頃は人なつこい性格の芽生えを、朝

22. *Song of the Exposition*, § 1.

23. *By Broad Potomac's Shore*.

の若草の芽ぐむに同じと見、或は大草原を蔽つて茂る春の草を讃えるなど、生成発展の勢に係っているが晩年の作になると上述の如く、その多年性とか、死生の繰返しによる永遠性等に関心が注がれている。彼の他の諸イメヂの辿り方と歩調を一にしていることが解る。

---

24. *Song of the Open Road*, §8. (1856).

25. *This Compost*, §2. (1856).